

ガイド

市川量造の略歴

市川量造の研究は、昭和51年刊、有賀義人著「市川量造とその周辺」の後に続く成果は出ていない。以下、上記著書を引用して市川量造の功績をたどってみたい。

1 量造の青年時代

市川量造は弘化元年(1844)12月8日、信濃国松本深志町下横田に、市川八十右衛門(名主)の長男に生れ、幼名を泰之助と称した。文久元年(1862・19才)に蚕種紙を携へ、これを外国商館に売り込むために横浜に出た。

そして、その足で水戸にまわり、2年間そこで修業に励んでいるが、彼の学問上の基礎はこの時に築かれたといわれている。このように彼は若い時水戸で学んでいる。その後の彼の啓蒙活動の多くは、彼が若くして横浜へ出て接した外国文化の刺激があったのではないかと思われる節が多分にある。明治4年に泰之助は名を量造と改め、この年の7月に松本藩から下横田町の肝煎兼副戸長を仰せつかっている。



翌明治5年1月には筑摩県から横田町の戸長に下命されているが、彼の筑摩県下に対する多面的な啓蒙活動は、この明治5年から具体的にはじまっているといえる。(※博覧会建言書は明治5年11月27日に筑摩県参事永山盛輝宛に出されているが市川の肩書は下横田町副戸長となっている)

彼の活動の主なるものとしては「下問会議」創設の提唱がある。彼が「上下の情の疎通なくしては県治上不測の禍を生ずる恐れあり」として「下問会議」の必要を時の筑摩県永山盛輝に建言したのは明治5年2月のことであり、永山はこの建言を採択し、翌6年9月に第1回の下問会議を開いているが、市川量造はその時より最後まで、下問会議議員として活躍している。また明治5年8月に、政府は松本城の施設を競売に付したが、量造は周知のようにこれを買戻し、松本城天守をその解体から救った。

2 信飛新聞の刊行と自由民権運動

同明治5年10月には松本での最初の新聞である『信飛新聞』を創刊している。この新聞は明治9年に筑摩県が廃県になり、長野県に合併されると一時廃刊となるが、市川量造は『松本新聞』としてこれを再出発させている。翌明治6年3月には地誌取調べを仰せつかり、松本13ヶ町の総理として調査に当たっており、同年7月には筑摩県医鬘兼病院の世話役を、同じく8月には学校世話役を仰せつかり教育の面にも尽力している。

同6年11月には松本城天守を借り受け、県下ではじめて博覧会を開いているが、この

博覧会は廃県になる迄都合 5 回も開かれ、その間この影響によって県下各地で博覧会が開かれるようになった。明治 7 年には凶荒への備え、産業開発のための融資を目的としてつくられた勸業社（翌年開産社と改む）の設立に尽力し、また明治 12 年 1 月には、松本新開の姉妹紙ともいえる教育時論雑誌である『月桂新誌』を創刊し、当時ようやく起ってきた自由教育推進のために力を傾けている。また明治 12 年 2 月には、府県会規則にもとづく最初の県会議員に当選し、県政のために敏腕をふるうことになった。



同 12 年は全国的にコレラが流行し、長野県にも患者が発生するようになると、市川量造は衛生委員として防疫に全力を傾け、同年 9 月防疫費増額のための臨時県会が開かれると、彼はこれを機に当時ようやく盛り上ってきた国会開設運動に、率先して立ち上るに至ったのである。そして翌明治 13 年 2 月 1 日には、安筑両郡の各町村の戸長、議長等百余名を浅間桐の湯に集めて親睦会を開き、自由民権運動の結社としての奨匡社設立を協議し、以後、愛国社と連携して国会開設運動に尽力している。一方同年 7 月には県会に県庁移転の議案を提出し、筑摩県廃県後の最初の移庁運動をおこしている。

さらに同年 8 月には松本農事協会の設立に尽力し、松本城本丸内に農事試験場（2 町 8 反余）をつくり、郡長稲垣重為を会長として果樹や野菜の試験栽培、繁殖等に努めている。以上のように彼は極めて多方面にわたり、積極的に地域の啓蒙に努力しているが、明治 15 年には南佐久郡長に、さらに同 18 年 3 月には下高井郡長になり、ここに彼の郡長時代が到来するのである。郡長就任は、県が彼に分県移庁運動をやめさせるためであったとする説があるが、その理由については今日定かではない。

3 私設甲信鉄道株式会社の設立

明治 19 年 6 月政府の中山道鉄道敷設計画（東京—高崎—松本—木曾—岐阜加納をつなぐ中山道幹線を指す）が突然中止となると、これに憤激した彼は郡長の職を辞して、松本・甲府・御殿場をつなぐ私設甲信鉄道敷設のために立ち上るのである。そして明治 20 年 7 月に甲信鉄道株式会社の設立をみると、自ら現地調査や資金の調達に尽力するが、明治 25 年に鉄道敷設法が公布され、甲府・松本間の大部分が中央線の第 I 期工事に加えられることになると、甲信鉄道株式会社はその存在意義を失うことになったため、既に得ていた本免許を返上してその業務のすべてを閉鎖したのである。

4 量造の晩年

この甲信鉄道敷設のことで、経済的に潰滅的な打撃を受けた市川量造は、明治 26 年 5 月に、生糸貿易商木村利右衛門の招きにより、その経営に参加するため一家をあげて横浜に移住したのである。これにより彼の信州における一切の活動は終りを告げるようになった。その後、明治 41 年 2 月 25 日に胃癌におかされて帝大病院に入院して手術を受けるが、65 才で永眠した。

※下問会議では議員は県からの下問に対して必ず「対策書」提出し審議に臨んだ。

